

ふるさとへぐり再発見

— 西宮古墳 —

24



西宮集落の北西、廿日山丘陵の南斜面に築造された古墳で、美しい切石の石室が南向きに開口しています。古くより学会で注目されていた古墳で、昭和31年8月7日付けで奈良県史跡に指定されています。

一辺32m、高さ5mの方墳で、三段に築かれており、墳丘表面が小石で葺かれています。周囲に幅の広い堀割を廻らし、北側と東西両側の尾根を墓域に取り込んでいることがわかります。

主体部の横穴式石室は両袖式で、一段に積まれ、玄室は奥壁、天井石共に一石で組み立てられています。

玄室長3.6m、幅、高さは1.8m、羨道は長さ9.1m、幅1.5mあり、羨道先端の側石は斜めに加工され築造時より墳丘から露出していたと考えられます。

石室の閉塞石は一般の礫石ではなく、板石による扉が取り付けられていた可能性があります。

石室内には兵庫県加古川流域よりはるばる運ばれた^{たつやまいし}竜山石製の^{くりぬきしきいえがたせきかん}刳抜式家形石棺の身が羨道に引きずられる形で残されています。^{ふた}蓋は失われていますが、身部は長さ2.24m、幅1.15m、高さは0.76mあります。この石棺の身の外面上下には幅0.14mの低い凸帯が彫りだされており、明日香村菖蒲池古墳の石棺と類似性が考えられています。

石棺と玄室の大きさからこの石室は追葬を考えない一人用の設計であることがわかります。

石室や墳丘の構造から、7世紀中葉から後半の築造とみられています。

この時期としては規模の大きな古墳で朝廷に仕えた平群氏の有力者の墓と思われます。

なお、後世のものですが、小石に^{ぼくしよ}經典の一文字を墨書した一字一石経が石室床面に散布していました。

